

ノーベル賞受賞の真鍋さん「好奇心が研究の原動力」

【2学期終業式 学校長式辞から】

令和3年、2021年がもうすぐ終わります。今年1年間で何か印象に残ったニュースや出来事がありますか。東京オリンピックが開催され、プロ野球では大谷選手の活躍が大きく報道されました。「二刀流」は英語で何と言うのかなと思って英語のニュースを調べてみると、Two Way と言っていました。実にシンプルです。

私が特に印象に残っているニュースは、日本人のノーベル物理学賞の受賞でした。日本人がノーベル賞を受賞したということ自体が喜ばしいのはもちろんですが、私はそれ以上に、受賞された真鍋叔叔さんのスピーチやインタビューが印象に残りました。

真鍋さんは90歳です。物理学賞を受賞された研究内容は、気候変動についての難しい話で、私は内容がよくわかりませんでした。終始にこやかな表情で、楽しそうにお話をされる真鍋叔叔さんがとても印象に残りました。

お話の中で、真鍋さんは、「最もおもしろい研究とは、社会にとって重要だからといって行う研究ではなく、好奇心に突き動かされて行う研究だと思います。私は本当に気候変動の研究を楽しみましたし、すべての研究活動を後押ししたのは好奇心でした。」という話をされて、自らの好奇心の大切さを強調されていました。「好奇心」って、英語でなんて言うかわかりますか。真鍋さんのスピーチは、日本語と英語で You Tube で見ることができます。好奇心は curiosity です。

私は、真鍋さんの言葉の中で、「研究」を「勉強」に、「社会」を「受験」に置き換えられるかなと思いました。どういうことかと言うと、「最も面白い勉強とは、受験にとって重要だからといって行う勉強ではなく、好奇心に突き動かされて行う勉強だと思います。私は本当に勉強を楽しみましたし、すべての勉強を後押ししたのは好奇心でした。」となります。真鍋さんは、ご自身が研究を行っているアメリカの大学で、学生に向かって「若い人たちには好きなことを見つけて挑戦してほしい」と話されていました。

好奇心をもって何かに取り組むときに、私が大切だと思うことを最後に一つ話します。それは、「わからないことを恥ずかしくない。わからないことをこわがらない。わからないことを嫌がらない。」ということです。確かにわからないことは面白くないと感じるかもしれないし、面倒だと感じるかもしれません。でも、わかっていることだけをやっていいのでしょうか。例えば、昨日テレビで見たプロ野球の試合について書いてある新聞記事を読むのはよくわかって読みやすいでしょう。でもそれでは新しいことを学ぶことはできません。

新しいことの多くは「わからない」からスタートします。「わからない」を解決することが「学ぶ」ということであり、わからないことがわかるようになる、できないことができるようになることが「成長」です。

1月から始まる新しい年、2022年は生徒の皆さんが自分を大きく成長させる1年になることを期待しています。

(校長 高橋信之)